

平成5年度赤潮貝毒監視事業報告 (要 約)

青森県水産増殖センター 山口 伸治・秋山由美子・永峰 文洋・田村 眞通
濱田船長他なつどもり乗組員
青森県環境保健センター 三浦 啓徳・高橋 政教
青森県水産試験場 木村 大・黄金崎栄一・伊藤 欣吾・鈴木 史紀
高井開運丸船長他乗組員
村上東奥丸船長他乗組員
磯島青鵬丸船長他乗組員

平成5年度における赤潮貝毒監視事業の調査結果の概要を以下に示す。詳細については平成5年度赤潮貝毒監視事業報告書(平成6年3月、青森県)に報告した。

1. 陸奥湾東湾における垂下養殖ホタテガイの下痢性貝毒の毒力は、1990年以降と同じく極めて低い水準で推移し、年間最高毒力は1.5MU/gであった。
一方、西湾における垂下養殖ホタテガイの下痢性貝毒の毒力は、過去最低であった平成4年(1.0MU/g)を上回る水準で推移したものの、年間最高毒力は2.0MU/gとこれまでの毒力と比較して高くなかった。
また、地まき貝の年間最高毒力は垂下養殖貝と同様に極めて低い水準で推移し、東湾が1.0MU/g、西湾が0.5MU/gであった。
2. 外海域産のホタテガイで規制値以上の下痢性貝毒の毒力が検出されたのは津軽海峡西部産垂下養殖貝のみで、その年間最高毒力は0.5MU/gであった。
3. ホタテガイを除く二枚貝で規制値以上の下痢性貝毒の毒力が検出されたのは付着性二枚貝(ムラサキガイ)のみで、その年間最高毒力は2.0MU/gであった。
4. まひ性貝毒は各海域、各貝種とも検出限界以下で、毒力は検出されなかった。
5. 平成5年の本県沿岸における下痢性貝毒によるホタテガイの出荷自主規制期間は陸奥湾産垂下養殖貝が3月19日～10月1日(10月1日付けで解除)、陸奥湾産地まき貝が4月12日～10月12日(7月16日付けで一たん解除となったが、8月27日付けで再度出荷規制となり、10月12日付けで解除)、津軽海峡西部産垂下養殖貝が4月19日～7月26日(7月26日付けで解除)であった。その他の海域は出荷自主規制は行われなかった。まひ性貝毒によるホタテガイ出荷自主規制は行われなかった。
6. 下痢性貝毒によるホタテガイを除く二枚貝の出荷自主規制期間は暖流系海域産付着性二枚貝(ムラサキガイ)が4月19日～9月3日(9月3日付けで解除)、寒流系海域産付着性二枚貝(ムラサキガイ)が6月21日～8月30日(8月30日付けで解除)であった。まひ性貝毒によるホタテガイを除く二枚貝の出荷自主規制は行われなかった。
7. 陸奥湾東湾におけるD.fortii出現数は低い水準で推移し、その年間最高出現数は770個/ℓであった。西湾におけるD.fortiiの年間最高出現数も東湾同様低い水準で推移し、その年間最高出現数は590個/ℓであった。
8. 太平洋海域におけるD.fortiiの出現数は低い水準で推移し、その年間最高出現数は80個/ℓであった。まひ性貝毒原因プランクトン(A.tamarense)は三沢の沿岸域で20～440個/ℓ出現したが、沖合域では出現しなかった。
9. 津軽海峡西部海域におけるD.fortii出現数は低い水準で推移し、その年間最高出現数は40個/ℓであった。
10. 津軽海峡東部海域におけるD.fortii出現数は低い水準で推移し、その年間最高出現数は40個/ℓであった。
11. D.fortiiの出現と毒値は大まかには傾向を同じくするが、明確な単相関とはならない。D.fortiiの出現状況と貝毒値の推移をさらに究明するには、公定法と平行して機器による貝毒成分分析を行い、ホタテガイへの蓄積、排泄の過程を明かにしていく必要がある。
12. D.fortiiの増殖にはこれまで言われていた水温等の環境条件が主体であろうが、さらに珪酸塩等の栄養塩も係わりを持つらしいことが判った。しかし、まだ1年間のデータであり、今後、さらにデータを積み重ねる必要がある。